まえがき

石　井　　敏

最近の日本では、非言語コミュニケーションの研究・教育に対する関心が高まっているようである。いわゆる「大学冬の時代」にそなえて、大学におけるコミュニケーション関連の学部や学科の新設又は増設が相次ぎ、コミュニケーション関連科目を含む教育課程(カリキュラム)の改定が急速に進む現在、非言語コミュニケーション研究・教育はますます重要視されるようになってきた。加えて、この分野の研究書、教育書、報告書、研究論文、経験談の類の著作物も散見されるようになった。しかし内容の多くは、理論と研究方法論から離れた身体言語に関する事例中心の概論や外国語学習・教育に付随した一般大衆向けのものである。

そのような折、平成 11 (1999) 年春に異文化コミュニケーション研究所から、本誌『異文化コミュニケーション研究』第 12 号を非言語コミュニケーション特集号にしたいので、客員編集主任 (guest editor) になってほしい旨の依頼を受けた。自らの浅学非才も省みず、依頼された重任を即座に引き受けることにした。特に異文化問題に関連した非言語コミュニケーションの新しい研究・教育動向を日本の関係者に広く知らせる必要性を日頃痛感していたからである。

基本的な編集方針として、異文化非言語コミュニケーション分野の最近の理論と研究方法論を最初に扱い、続いてそれらの応用ないし発展としての研究・教育に関する投稿論文を紹介し、最後に非言語コミュニケーションとは直接関係はないが異文化コミュニケーションに関連する投稿論文と実践報告を加えることにした。具体的には、異文化非言語コミュニケーション研究で著名なフェルナンド・ポヤトス氏には最近の理論的研究動向、この分野で現在活躍中の東山安子氏には研究方法論に関する論文執筆をそれぞれ依頼した。その他は全て編集委員会に投稿された論文又は実践

報告である。

本紀要第12号が日本における異文化非言語コミュニケーション研究・教育の体系化と広くは異文化コミュニケーション研究・教育の一層の充実と発展に寄与することを願う次第である。

最後に、本特集号の編集に際しては、石井米雄所長には「あとがき」を執筆していただき、各査読者には投稿論文審査の労を執っていただき、久米昭元副所長以下所員の皆さんには編集作業の面で一方ならずお世話になった。ここに謝意を表したい。